

練馬区小中一貫教育資料作成委員会（第16回）「キャリア教育の推進」部会 要点録

開催日時	平成22年10月6日(月) 午後3時17分～午後5時04分	
会場	練馬区役所本庁舎12階 教育委員会室	
出席者	委員	石井友行、小野雅保、世古徳浩、安井実、望月徳生、野田恵威子、高橋吉久（敬称略）
	その他	教育出版
	事務局	鈴木裕行 指導主事

1 挨拶

部長

中学校はいま評定とか所見の作成業務で忙しいと思うので、定時で終わりたい。鈴木指導主事から新たにアニメに関わる事例が出されたので、前半はそちらのお話をしただけだと思う。その後、野田先生の事例について再度検討したい。また、飯塚先生、望月先生が来られたら特別支援学級の事例の確認が必要なので、その時間も取りたいと思う。

2 討議

事務局

最初に、私からアニメの事例について提案する。実はこの部会とは別に練馬区の基本構想で、アニメ産業を支援し、充実させていこうという方針が出されている。お手元の資料の二つ目に「練馬区基本構想」があり、中を開くと抜粋だが「ねりま未来プロジェクト」の中の「アニメプロジェクト」などがあり、さまざまな事業の計画が出ている。これは教育委員会というよりも商工観光課が中心に取り組んでいる。

三つ目の資料は「アニメ産業と教育の連携事業」である。この部会とは別に検討会議を重ねていたが、その中でアニメ産業との連携はキャリア教育の視点で考えられるのではないかという考えに至り、小中一貫教育のキャリア部会の中にもアニメの事例を盛り込む必要があるのではないかということで、教育委員会の方針として入れさせていただきお願いがまず一つ目である。

資料5、6はアニメーターの方やアニメを活用したプログラムなどを提案している委託業者が他の区や市で行っている例である。こういったものを参考に、私のほうで事例をまとめて原稿に起こしていくことを皆さんにご了解いただきたいと思う。

それから参考資料として、中学校の社会科の副読本の中にも練馬のアニメについて取り上げているページがある。練馬区はアニメ産業を支援していて、今後は教育委員会においてもそれを無視したままにはしておけない状況である。

お時間を頂ければどういった事例が考えられるか、また、今までのキャリア教育の議論の中で整理された小中一貫の位置づけのどの辺に位置づけられるかというご意見を

頂ければと思う。

委員

アニメと言うと作画のほうにばかり気をとられがちであるが、実は子どもたちは声優という職業にもものすごく憧れている。というのはアニメというのとはすごく特殊で、絵が描けないから自分は駄目だ、美術部やイラスト部のうまい子たちはできるかもしれないけど自分たちには無理だと感じて、声優であればできるかなと思って憧れている子が結構多い。「声優になるにはどうすればいいですか」と普通の子が質問してくる。表現力の指導の際には、声優の部分がちょっと入ると興味をもって聞くとと思う。

事務局

このアニメ産業の人たちとの検討会議でも、アニメーターの方や東映アニメの方など練馬区にかかわる業界の関係者の方々が学校に行って一緒に教育活動することも視野に入れている。そういった意味では声優の方とも連携できる可能性はあると思う。

部長

宮崎駿企画・脚本の「アリエッティ」の監督が新しい監督で、NHKか何かのドキュメンタリーを見たが、あれはすごかった。総合芸術という形で、アニメーションの作品を一つ作るために、多くの人たちがコミュニケーションをとり合い、チームワークを保ちながら作る。ああいうたくさんの人たちが一つの目標に向かって何時間も、何日も、何百日もかけて地域の地場産業でやっている。キャリア教育の職場体験の中の社会形成能力の辺りに着目しながらやれば、例えば職場体験とは違った意味合いでできるような気がする。この中で練馬の「アニメ」という3文字は分かるが、産業としてアニメーション産業がどんなことをどれぐらいやっているのか。例えば西陣などはかなり分業でやっている。練馬の地場産業としてどれぐらい、どのようなことをやっているのか把握しているのか。

事務局

数字的には調べないと何とも言えないが、アニメーションのプロダクション、会社、スタジオは練馬区に結構ある。杉並区に負けないぐらいあるのではないかな。多くが小さなスタジオで、請け負った作品のアニメーションを作っていて、その中には家庭の主婦がいたり、アニメに憧れて入ってきた方などがいて細かく仕事を分担して働いている。そういうプロダクション、スタジオが区内にたくさんあり、その最大手が東映アニメである。

委員

検討調査報告書の8ページにある事業目標の「“ココロ”と“チカラ”を手に入れよう」というイメージ図を考えながらいろいろな事業が進んでいるのか。

事務局

これは検討会議で立てた柱である。

委員

「仲間と助け合う」とか「練馬区から世界へ羽ばたく」など、なるほどと思うものがある。

事務局

この辺も切り口として参考になると思う。検討会議の実際の事業のプログラムとしては、今お話にあったこの調査報告書の終わりから2枚目に資料4のプログラム実施案がある。これは小学校5、6年生を対象にした総合的な時間または図画工作等で6時間の構成が考えられている。実際に子どもが簡単なアニメを作りながらアニメ産業の業界の方々とも交流して仕事の基本的なことを理解して、またその中で創造性を養っていくという授業になると思う。

ちょっと話は飛ぶが、実は商工観光課のこの事業の先には区内でアニメーションコンテストをやっていくという企画があり、こういったプログラムを通じて子どもたちが作った作品を応募してもらい、審査して表彰していこうという目論見もある。それが今の報告書の20ページの「アニメ作品コンテスト・イベント」である。別立てでこういう考えも持っているが、あまり縛られずに事例は事例としてきちんと作っていきたくて思っている。

委員

教育的で非常にいいとは思いますが、ここまで行くには道のりが長い。アニメ産業の人の気持ちは分かるがもうちょっとハードルを下げてもっと参加しやすくしたい。「この絵は私が描いた」とか「この言葉は私が言った」というレベルで参加するほうが現実的である。それが地域のケーブルテレビか何かに流れているといったほうがインパクトがある気がする。

事務局

そういう意見も検討会議には出ている。とりあえずこちらはこちらでキャリア教育の事例として提案していただけなので、この内容には縛られなくていいと思う。

委員

これはキャリア教育の一つとしてこういう職種があるということを言いたいのか。それとも、先ほど先生がおっしゃったように、大人も一つのものを作り上げる時にはいろいろな部署があって、チームワークをとりながら行っていることを感じさせたいのか。

事務局

様々な切り口があるので、その辺りいろいろなご意見やアイデアを頂きながら提案していきたい。

委員

去年、中間報告の事例2で「マンガ家になろう」を個性伸張の視点で行っている。それをさらに発展させて、自分の個性や得意なことを生かすということであれば、例えば先ほど声優の話が出たが、声優としての役割を果たしてみたいとか、絵を描くのが得意な子など、第Ⅱ期の「夢から希望へ」の括りにつながっていくような気もしないでもないなと思いながら話を聞いていた。

アニメにはいろいろな人の力が必要で、1コマ1コマ動画を作っていくとか、色を塗るとか、地道な作業がある。いろいろな仕事があって、それぞれが自分の長所や個性を生かしながらすばらしい作品ができあがっていくことを理解するのも、一つキャリア教育の切り口としておもしろいと思った。先ほど小野先生からお話があったが、監督としてそれをトータルで見ながらここは駄目、ここはいいと作品を仕上げていく役割の人もある。そういう役割理解、職業理解の切り口の一つとしてはあるかなと思う。

委員

卒業制作のようなものと絡めて、ちょうど5年生、6年生ぐらいで、マンガの主人公になりきって演じるとか、声優なども絡んでくるようなものを卒業の時に発表するなど、勤労とか職業にはあまりとらわれず、自己肯定感や自立心でいったほうがむしろスムーズに入っていけるかもしれない。

委員

一つのものを作り上げるためにいろいろな人がいろいろな関わりをする。そして協力し合って一つのを完成させるということを理解して、では自分の個性をどう生かしていこうかというところにつなげていけるのではないか。

委員

Ⅱ期の事例だと思う。中間報告書の図の、例えばⅡ期の学習期の中の「いろいろな職業があることが分かる」とか「役立つ喜びを体得し、社会と自己のかかわりから、自らの将来について希望を膨らませる」などに位置づければよいと思う。

部長

総合の時間で異学年の総合学習はできるのか。

委員

できる。現にゲストを呼んで異学年でやることもある。

部長

例えば、小学校6年と7年、要するに6年と中1の接続で一緒にやるのは、多そう
でいて意外に少ない。その接続のところに何かアニメーションのような共同作業を
入れられるのであればいいのではないか。

委員

例えば学校のコマーシャルを作るのにアニメの手法を使うことも考えられる。そし
てその中に監督の係、声優の係、いろいろな役割がある。

部長

「桜アニメーションスタジオを作ろう」など学校の中にスクールスタジオを作り、
その中である学年団がリーダーをとりながら「桜学園の緑を」などのメッセージをア
ニメにして発表する。

委員

それでプロの人に来てもらえば、どのようにアピールするとより効果的か、BGM
はどんな曲を使うと効果的かなどについて学ぶチャンスにもなる。例えば一つの文字
の提示の仕方でも、プロはいろいろなノウハウを持っているはずである。そういうの
をトータルしてコマーシャルを一つ作るのはいいかもかもしれない。

委員

「キッザニア」の事例があったが、まさにあれを学校でやるような感じではないか。
一人ひとりが監督係になったり、アニメーターになったり、声優になるなど、役割分
担をする。

事務局

総合辺りで行うか。

部長

異学年総合ではないか。「学校にアニメスタジオを作ろう」というのはおもしろいか
もしれない。

事務局

学年としては、Ⅱ期で完結する感じか。

委員

1から4だとちょっと厳しいのでⅡ期でいいと思う。

委員

「夢から希望へ」とも合うような気がする。

委員

できたものを毎年学校から情報発信したらすてきなことだと思う。

部長

ダイジェスト版をホームページに入れてもいい。

委員

小学校の学校紹介などで子どもたちが携わっているようなことはないか。

委員

小学校がアピールするというのはあまり聞いたことがない。逆に中学校側が小学校に向けてアピールするのはあるが。

委員

昔5年生の社会科の産業学習に「情報で働く人々」があり、子どもたちに「ニュースを作ってください」といって、子どもたちがニュースキャスターになったり、カメラマンになったり、アナウンサーになったりしてニュースを作ったことはあった。

分担してグループごとに一つのニュースを作る。例えば「学校を紹介します」とか「こんな事件がありました」「〇年生にインタビュー」のようなことをやったことがあるが、やはりアニメも産業学習の一つでもあるのかなと思う。

事務局

言葉は適切ではないかもしれないがある意味地場産業的な存在なので、その業界の方にも学校教育に協力していただくような流れがあると非常にいいものになる気がする。一応、時間限定でご意見を頂戴したということで、今のご意見を参考にしながら事例を挙げていきたいと思う。そのような形で事例を1本追加するというをご了承いただければと思う。次に、野田先生にお願いする。

委員

この間のお話で、4番の「本事例とキャリア教育との関連」を具体的に文章化し、4番に入っていた部分は3番の「ねらい」に上げた方がいいとのご指摘があったので

そのように変えた。あとは5番の米印を消してつなげた。それから「職場体験アンケート」という事業所へのアンケートの3番では、学校から確認の電話をした後に生徒から電話がいくという順番に変えた。写真を入れろと言われたが、文章が増えてしまったので写真はどうするのかなと思い、今回は入れなかった。

事務局

前回の検討を受けて修正したというお話があった。特に1枚目の4番、5番あたりの押さえがポイントかと思う。

委員

地域の人たちがこの職場体験をととても応援してくれているという文章がこの間より膨らんでいて、特に4番あたりは2倍ぐらいに膨らんでいる。「強い支持と協力を得ることができる」「巻き込んで展開しうる」とある。学校だけが何かを得るわけではなく、やはり事業所のほうもそれで精神的に得るものがあるということだと思う。

部長

高橋先生から表現部会の職場体験と重複するかどうかという話があり、ファクシミリをもらった。表現部会はインタビューが中心なのか。野田先生の事例は体験なので大丈夫なのか。高橋先生が来たらまた説明してもらえればいいかと思うが、他のところもぶつかっていると思う。そこは鈴木先生、確認しておいてもらった方がいいと思う。

事務局

前回お話があったので、表現に限らず他の事例も一応、担当指導主事同士で意識はしている。最終的な事例の扱い、位置づけは教育委員会の方で判断させていただく。

部長

最終的には差別化できればいいと思う。

事務局

では続いて望月先生にお願いします。

委員

今日はA3を1枚しかお配りできないが、項目の柱の順番が違っていたのでまずそれを直した。それから「本事例とキャリア教育との関連」で3本柱を立てていたが、それに簡単な説明を入れた。今回は写真を含めて1ページに収まっていたが、文章が増えて収まりきれずに2ページ構成になる予定である。何も入っていない四角の枠のところには前回1ページを使っていた「自立チェックシート」を二つばかり載せて、

あとは CD-ROM に入れて紙面からはカットしていきたいと思っている。その他のページについてはもう一回自分で構成し直させてほしい。

事務局

⑤の辺りが重要になるかと思う。

部長

指導時数が年間 18 時間×3 年間になっているがこれでいいのか。

委員

はい。

委員

右上の（注 1）に記載がある。

部長

職業課程の時間自体が週 2 時間あり、それが中 1、中 2、中 3 で 2 コマずつ続くということか。

委員

はい。

部長

この単元のねらいは職業家庭科の教科のねらいではないか。⑥概要に書いてある 1～2 時間目から 18 時間目までの内容であれば、「パソコンの活用による～」といったことが単元のねらいになるではないか。

委員

パソコンを使っている時間が年 18 時間×3 年分である。職業家庭には他に農耕とか調理実習、清掃活動のようなものがあるので、一応パソコンの部分だけを切り抜いてここに明記してある。

委員

むしろ「35 週×2 コマ×3 年間」は要らないのではないか。

部長

これはとってしまってもいいかもしれない。これは職業家庭科の説明になっている。

委員

一つ上に「全学年 指導時数」と書いてあるが、「指導時数」はだぶっているのではないか。

委員

「指導時数」はとることにする。

事務局

「②実施学年 全学年」「③指導時数 18時間」だけでいいのではないか。

委員

全学年でよいのか。

委員

この 18 時間の一つのコアにして、1年でやり、2年でやり、3年でやるということで、だんだん基本から発展と進化していく。習熟度によっても違ってくる。

部長

3年間を見通した定着や習熟があるので、この 18 時間の内容がスパイラルのようになっていると思う。一つのパッケージになっていて、そのパッケージを初級編、中級編、上級編のような形に改編して、1年で授業をやり、2・3年でも授業をやっている。もしこれを生かすのであれば、そういうことを何かを米印で書いておいてもらえれば読み手は分かると思う。全く同じことをしているわけではないが、同じに見えてしまう。

委員

それでは指導時数のところに「年間 18 時間」と入れ、そこに3年間で基礎から応用に変化していくというような説明を入れる。

部長

学習時間についても個別の配慮が必要だと思う。18時間で習熟する子と30何時間必要な子が当然出てくる。「本事例とキャリア教育との関連」に「本事例はパソコンを用いて」とか「パソコンで入力する作業を通して」あるいは「支援教材としての教科学習ソフトを用いて」とか何かそういうことをここの習得のところに入れておいてもらおうと、「ああ、そうなんだ」と理解できると思う。

委員

右側の上の（注1）（注2）は左側のページのどこに該当するのか。

委員

これは⑥の「概要」のところに該当している。

委員

これは「概要」の追加の説明で大事なことを書いてあると思う。(注1)(注2)という表現ではなく、例えば罫線で四角囲みするとか、「概要」のすぐ下のリード文のような扱いにすることも可能かと思う。この(注1)(注2)の内容をそっくり「⑥概要」の次にリード文のような形で持ってきて、具体的には以下のような計画で進むという扱いにしたらどうか。これは補足説明というよりも指導計画全体に関わる説明で、すごく大事なことが書いてあると思う。それから写真はだいぶ苦勞されたと思うが、生徒の作業風景の写真も似ているものが並んでいるので、一番アピールしたい写真、例えば補助者がついて支援しながらやっている右側のものを残してあとは削ってもいいと思う。

事務局

⑥概要の略案について、今日、野田先生が出されたものに合わせて表組みで18時間の指導計画をまとめると、先ほどの(注1)(注2)を本文にして書きやすいかと思う。

委員

⑥までは統一の様式でいく。1番が「～期における事例」のような形で「事例9」となって、ここの②③が2の「実施学年・指導時数」、そして3が「ねらい」、4が「本事例とキャリア教育との関係」、5が「本事例の小中一貫に期待される効果」で考察めいたことを入れるのがある程度のルールだと思う。

部長

特別支援の場合は「小中一貫」は厳しい。

事務局

一応この部会の今までの協議の中では、この特別支援学級の事例については無理に小中一貫、小中連携にしないで、キャリア教育の柱でまとめていくという確認があったと思う。

委員

とらえ方としては、支援学級の子たちもキャリア教育をやっているのだということでもよかったと思う。

部長

I期・II期・III期と固定することが特別支援学級、固定学級の望む形かどうかという議論はあまりしていない。ただ、例えば技術などはまずどのぐらい習熟しているかを知らないとどこから取り掛かっていいか分からないので、よくプレテストをやったりする。家にコンピュータがある固定学級の子も当然いると思うが、その子の事前の体験とか既知学習、既に学習して生かしていないか、学習体験などが小学校と中学校の連携でいち早く情報としてもらえれば、その子の指導に生かせると思う。連携ぐらいならできるかもしれない。一貫だとイメージがなかなか難しい。

事務局

事例というよりも継続的な児童・生徒理解ではないか。個別指導計画で小学校段階、中学校段階とずっと引き継いでいく中でその子のことがよく分かり、そのうえで教育活動が図れる、そういうメリットは非常にあるかと思う。

部長

そういうところは書ける。

委員

他のところにはないかもしれないが、新たに特別支援のところだけに「今後の課題」という項目を設定し、連携について今後こういう方法などはどうかといくつか挙げてみる。

委員

それはいい。

部長

支援計画には教育の面や福祉の面、医療の面、家族とのかかわりなどが大切になる。それは卒業してからも続いていくし、入学する前も当然必要になるので、そういう軸を何か書いておいてもらう。特別支援の場合のかかわりは小中連携、小中一貫よりもっと広い視野だと思う。教育だけではできない。医療だって相当のところまでやらなければ駄目で、福祉だって結構出てくる。これは結構、範囲が大きいと思う。

委員

言い方を換えると支援学級は一貫教育で行かないと、小学校と中学校で切れてしまうわけではない。

委員

今は一貫教育のための資料として個別指導計画や支援計画をやっている状況で、そ

れを今後うまく活用できるかどうかだと思う。それから個別指導計画からは読み取れない部分が教科のレベルではある。国語、数学、体育ぐらいは大まかに記入されているが、それ以外はなかなか記入されていないので、そういうチェックシートのようなものを9年分作って引き継いでいければいいかなと思う。

事務局

石井校長先生に質問だが、望月先生の提案の中の「自立チェックシート」と同じようなチェックシートや項目などは、小学校の特別支援学級でも設けたりするのか。

委員

結論を言うと、本校はいわゆる練馬方式でちょっと独特な教育活動をやっているの、そういう「自立チェックシート」の扱いはない。ただ他の9校がどうかということについては情報がない。

事務局

大泉中学が自立検定という同じようなチェックをしているので、もし小学校でもやっていたら引き継いでいく内容になるのかなと思う。

委員

小学校から中学校に上がってきた時に紙面では分からない部分があるので、中学校で子どもたち一人ひとりを理解するためにやろうということだと思う。だから、やはり今後の課題のところに「資料の統一化のようなものがあるといい」というコメントが少し入るといいかと思う。

部長

特別支援学級、固定学級も情緒、通級もそうだが、年に何回か担任の先生を含めて会議をする。そして情緒はわりと小中一緒だが、小学校と中学校は一緒に会議を行っているのか。

委員

やっている。いま障害別でやる時は結局、自分のところに入ってくる子たちについての情報交換で終わっているが、もう少し視野を広げて運営できるといいと思っている。小学校、中学校それぞれで研修をやっているが、やはり小学校は小学校、中学校は中学校の研修内容になってしまっている。そこの一貫性も今後求めていってもいいかと思う。

事務局

特別支援学級の生徒がパソコンを活用すると、活用していない時の学習活動と比べ

てこういう点で教育効果が高まるとか、非常に意義があるというようなお話があれば入れてもいいかなと思うがどうか。

委員

入れられる。例えば言葉で会話ができない子も、キーボードであれば入力してそれを表現できる。それからやはりインターネットなどを使うことによって調べ学習の幅が広がり、教師から一方的に話を聞いて理解するだけでなく、自分で探していくことが身につく。その辺の変容を少し入れる。

事務局

では高橋先生がいらっしゃったのでお願いします。

委員

前回、部活動をいわゆる体験だけに絞り、5年生、6年生と幅のあったものを6年生に絞り、ページは6ページ構成でということだったので、一応そのような形に直した。それからそれに伴って4ページをだいぶ圧縮したが、保護者会での部活動体験についてのお知らせや重要な説明事項などのガイドラインは1枚に収めた。また、「活動記録&振り返りシート」は「部活動体験記録シート」に変えて「こんな部に参加してこんなことをやりたいと思っていた。やってこんなことが分かった」と記録していくことで、次の本入部に向けて自分の適性などを見定めていけるように構成にした。

あとは語句の部分で、「3年生が怖い」とあったがあまりそのものずばりなので、「上級生が怖いと言われているので少し心配」という言い方に変えた。それからどの資料を使うのかが分かるように、資料1、資料2、資料3をここで使うと指導計画の中に入れた。

委員

資料8の(1)の記号と、資料の文章の中の1の(1)(2)が混在していてすごく見づらい。また、四角の上にイとウがあるが、アはどこだろうと探してしまった。体験のお知らせに何か枠組みをすとか工夫が必要ではないか。

委員

タイトル自体を「8 資料」ではなく「8 保護者会説明時資料」にしてしまえばアは削除してしまってもいいと思う。そして次の頁が「(2) 仮入部カード」になっているが、これを「9 資料 仮入部カード」、次頁は「10 資料 部活動体験記録シート」とすると、番号としては分かりやすくなる気がする。

事務局

この辺は事務局が編集段階で他の部会の事例と統一感を持つようにしたいと思う。

部長

せっかく5年生を消したのに1ページ目の5（1）では5・6年となっている。

委員

消し忘れていた。

事務局

この辺は今まで何度も協議しているのでだいぶ固まっていると思う。

部長

先ほど「3年生が怖い」を「上級生が怖いと言われているので少し心配」というお話があったが、「上級生の指導が厳しい」などちょっとニュアンスをやさしくしてもいいかなという気がする。

事務局

では「厳しい」にする。

部長

あと「喘息持ち」という言い方はちょっと気になる。「持病があるので」などあまり具体名を出さないほうがいいかなと思う。

委員

それから6の表中の文章は箇条書きなので、文頭に中黒を入れられないか。

委員

そのほうが読みやすい。

委員

「楽しみなこと」の中に「合宿をする」とあるが、これは学校としてはどうなのか。

委員

ベルデを使う場合には認められている。

部長

その時は6年生が連れていくのか。

委員

実際に始まったら連れていくことになると思う。

部長

保護者主催のような形にして行くのか。

委員

一応、保護者主催で行く。

事務局

今のお話にあるのは林間学校とは別ではないか。一応、教育委員会の事業にあるのは林間学校で、それは中学校の宿泊学習活動という位置づけで行う。合宿は公に認めていないので、この辺の表記の仕方については気をつけなければいけない。林間学校ぐらいに収めておけば無難である。

委員

その文言はとることにする。

部長

「すらすらと楽器ができるように」という表現はどうか。「うまく」といった表現に変えてはどうか。やはり部活への期待度は高いのか。

委員

期待度は高いがやはりお楽しみクラブぐらいの意識しかないので、中学生からすると「あいつ休みやがって」と感じるようである。「なんで来ないんだ」とか「なんで習い事を優先するのだ。おれは塾に遅くなって怒られているのに」とか、そういうことを言っている。

委員

2ページや3ページの下のほうに写真は入れられないか。

部長

行間を空けて入れてはどうか。

委員

ちょうど今5年がやっているなのでそれだったら入れられる。

部長

小学校の先生のかかわり方はどんな形になるのか。4時間扱いでやるのならば小学校の先生も関わっているのか。

委員

何らかの形でどなたかには残ってもらいたいと言っているが、5時までである。

委員

けがをした時の対応や連絡先なども中学では把握できないので必要である。

委員

小学校の担任あるいはクラブに関係する人はお残りいただいている。

委員

でも、来年度は大泉桜の職員室が一つになると思うが。

委員

来年は何の問題もない。ただ、ここでも議論になったが、5年生が入っていくことで多少難しさは出てくる。

部長

「オリエンテーション活動紹介（1時間）」というのは、誰かがどこかで説明するのか。

委員

保護者への説明は生活指導主任と部活動の担当者と校長が行って説明し、子どもたちへの紹介は放課後、部長などが行って説明することもある。どうしても時間が合わない時は、担当者からの説明になってしまうこともある。

部長

「2 実施学年・指導時数 6年生：5月 4時間」と書いてあるが、この4時間が終わった後はどうするのか。

委員

本当は本入部になる。でも本入部になるといろいろな兼ね合いが出てくるので、一応切りましょうというのがこの前のお話だったかと思う。

委員

この4時間というのは純粹に体験が4時間なのか。

委員

最低1時間はやりましょうということである。保護者への説明で1時間、生徒への説明で1時間、それからどこを希望するか子どもが選ぶので1時間、そして1時間は体験、それらを合わせると4時間になる。

部長

「部活動体験」という題名がついていて体験が1時間となるとどうか。

委員

「(1) 本事例の指導計画」のところに例えば部活動体験を1～〇時間のように仮に最大の枠を決めておき、2の「指導時間」も説明が何時間、体験が1～〇時間、計〇時間という感じにするともっと分かりやすい。

委員

保護者の説明の1時間は教育活動ではないので、時間ははずしておいたほうがいいかもしれない。

委員

「保護者説明会 1時間」と別枠にして時数にカウントしない。

事務局

小学校で特別活動、学級活動として位置づけられると教育課程内の時数を計算した授業時間内になる。小学校の特別活動、学級活動として教育課程内に位置づけた場合、この部分が矛盾する可能性がある。この辺どう示すか気をつけたい。

委員

そうですね、学級活動として。

事務局

ところが保護者向けの通知をよく読むと「月曜から金曜」とか「4時まで」とかいろいろと書かれている。

委員

この仮入部は4時間以外でやるのだと思う。

委員

指導としての時間が何時間、活動としての時間が何時間、そんな感じか。

事務局

この体験そのものが4時間であれば、これは計画としてやったことになる。そしてプラスαで保護者の了解のもとに希望者は教育課程外の放課後の活動が体験できるという位置づけになると思う。そこは明示したほうがいいかと思う。小学校の授業としては「ここまでは授業です」ということわりがほしい。

委員

明確になればいいと思う。保護者説明会かどこかに一文入ってくればなおはっきりする。

部長

「(1) 本事例の指導計画」の「部活動の体験」に「活動時間…放課後5時まで」と入れてはどうか。放課後何時からというのは6時間授業、5時間授業で日によって変わる。

事務局

そうすると小学校の先生のかかわり方も明確になると思う。

部長

ただ、放課後5時までの時間も自主的な教育活動になってしまい無理だと思う。

委員

本来、部活自体が放課後活動である。

部長

3時45分から4時半までは勤務を要さない。これは労基法の関係もあってやれとは言えない。小学校の先生は部活をやっていないし、その時間にやるとなったらゲストティーチャーか何かでお互い協力してやるとか、外部指導員的なゲストティーチャーレベルだと思う。

事務局

実際に小学校で部活動体験をやっている学校があると思うが、そこは小学校側としてどういうふうな位置づけで先生たちが動いているのか気になった。

委員

5時間目か6時間目のクラブではないか。

事務局

授業時間のコマをあててやっているという部分も示さないと、中学校側は6時間授業の日を5時間授業にして、そこを部活動に置き換えることもありうるかもしれない。

委員

それで1時間カウントしておいて、あとは放課後の活動にする。

委員

任意の参加というようにしておく。

委員

その文面と環境を設定してしまえば問題はありませんね。説明して希望をとって、体験で1時間、合計3時間でいく。

委員

説明と希望で1時間にするか

委員

それぐらいのほう現実的だと思う。というのは小学校の学級活動は35時間しかなく、その中で話し合っ活動とそれ以外のいろいろな指導をしなくてはいけない。それこそ給食の仕方や図書館の利用の仕方などいろいろな指導内容が35時間にある。ですから現実的には、これだけで3時間というのは結構大きいと思う。

委員

2時間でいければ一番現実的かなと思う。

事務局

中学校側の授業時間を特別活動に設定する配慮も必要になる。

委員

「小中で設定」という言葉を入れる。

委員

小学校の教員の一番の警戒感はそれだと思う。一緒の学校で一緒の職員室で一緒に

仕事をしている仲間なので当然、見て見ぬふりするわけにはいかない。同じ職場の中学校在籍の先生たちが夕方暗くなるまで部活をやっているのに小学校の先生が職員室で事務しているというのは現実的ではないと思う。風土がどうなっていくかは分からないが、たぶんそれが無言の圧力となってくるだろうと思う。

部長

土日は練習試合とか、公式もある。

委員

地方は職員室が違っていると聞いている。私の友だちは大分だが、5、6年生だけ中学校にいて、1、2、3、4は小学校に残る。先生がおっしゃるように、彼女は小学校の先生なので1、2、3、4のほうにいくとセーフで、向こうにいくとやはり中学校の先生の流れで小学校5、6年生の先生もやらなければいけないのでちょっと大変だと言っていた。

委員

低学年の先生は授業時数がちょっと短いから空いている時間手伝ってくださいという流れが出てくることも考えられる。そこは何とも言えない。

事務局

全体を通してどうか。

部長

今までサンプルとしての事例集は練馬で出ていなかったのか。

事務局

昨年度の中間報告以外はない。

部長

今まで全くなかった。他の区市でもないのか。

事務局

他の区市ではカリキュラム作成など、いろいろな検討資料はできあがっている。実際に小中一貫校を開校した他の区市が検証という形で研究授業を行ったり、そういう研究を続けていく例はある。その成果なども集めていかなければと思う。では、次回は毎月19日火曜日、同じくこの教育委員会室で開催する。お手数ですが修正したものを電子データで頂けると集約しやすいですので、副校長先生を通じて私のほうに頂ければありがたい。では、最後に石井校長先生よろしくお願ひします。

委員

いよいよ次回は最終回ということで、めでたし、めでたしで終わりたいと思う。よろしく願いいたします。